



モテモテさが創刊号まで全表紙見せます！



MOTEMOTE さが編集部にて



佐賀新聞社・佐賀新聞文化センター社長 中尾清一郎

佐賀新聞文化センター常務取締役 MOTEMOTE さが発行人 橋詰 空

最多出演有名人 茂木健一郎さんメッセージ

『MOTE MOTE さが』100号、おめでとうございます！
私の母親の生まれ故郷佐賀。その佐賀で、地元の方々のハートに根付いたメディアとして、『MOTE MOTE さが』が歩んできた道のりは、関係者の方々にとっては山あり谷あり、必ずしも平坦なものではなかったかもしれませんが、読者にとってはよろこびや愛に満ちたものだったのではないのでしょうか。

メディアを取り囲む環境は激変しています。新聞やテレビに加えて、インターネット上にさまざまなコンテンツが登場し、人々の接する情報も移ろってきました。

そんな中、地域に密着した媒体の意味が増してきています。インターネットは、いきなりグローバルな世界です。そこには地球上のさまざまな情報が飛び交っていますが、一方で地域の温かさやコミュニティの絆が見えにくくなるところがあります。

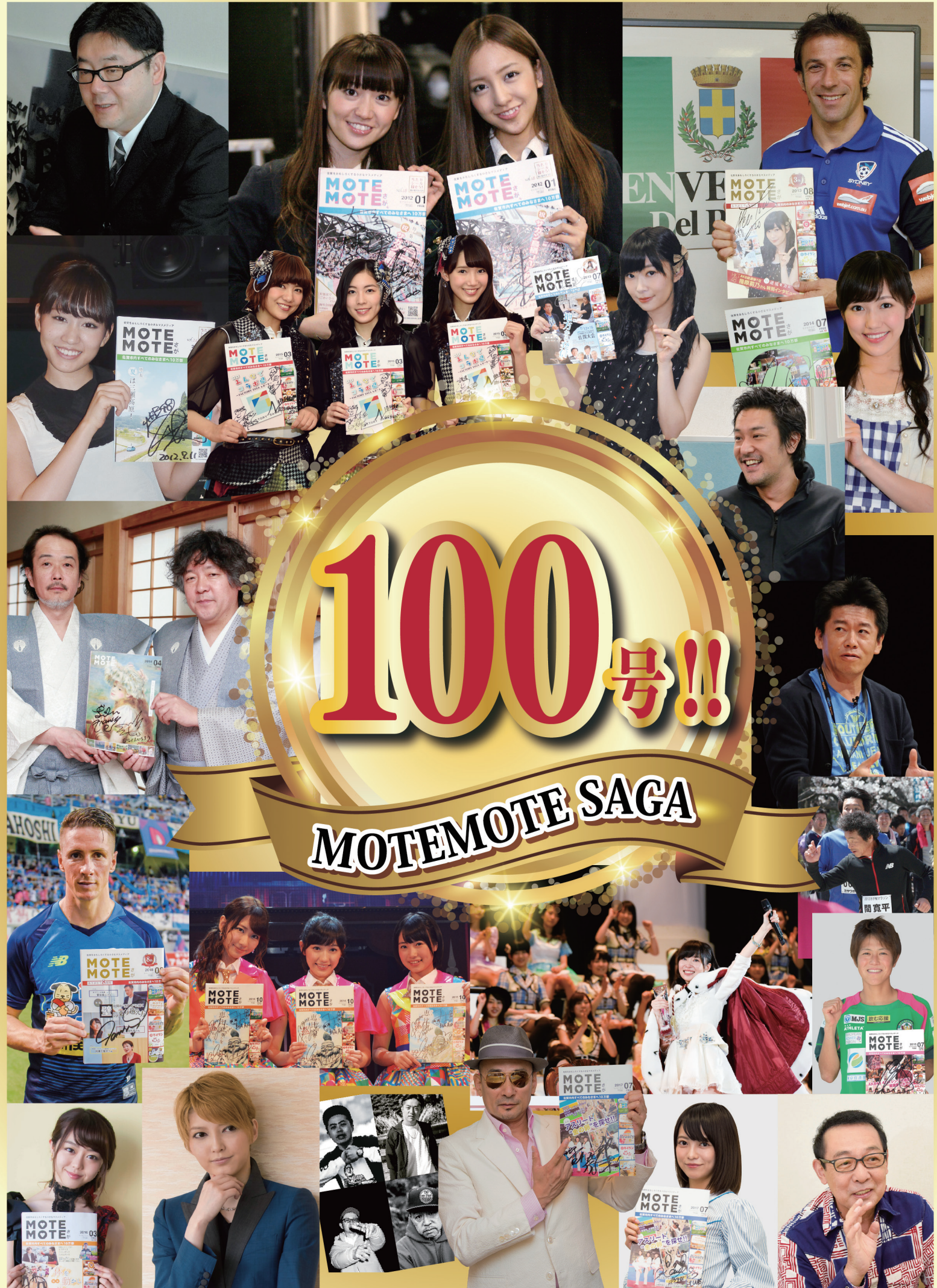
佐賀新聞社が長年育ててきた地域の方々との関係性を背景に、まさに地元密着、温かく細かいところまで行き届いた情報誌として発展してきた『MOTE MOTE さが』の意味は、これからのインターネット時代、グローバル化の世の中ですますます大きくなっていくのではないかと感じています。

佐賀新聞社社長の中尾清一郎さんや、佐賀新聞文化センターの常務取締役の橋詰空さんから、『MOTE MOTE さが』の歩みについては折に触れてうかがっていました。それが、私も機会があって連載を持たせていただくことになり、毎号、原稿を書くのを楽しみにしています。

『MOTE MOTE さが』の紙面を見ていると、手作り感のある記事の読み応え、地域の広告を眺める面白さにいつも時間を忘れます。とりわけ、地元の企業さんや、お店、その他の情報が満載の広告の数々は、他では得られない貴重な情報として、毎号わくわくしているところです。

『MOTE MOTE さが』100号は、あくまでも最初の一步なのでしょう。これから、200号、300号、そして1000号と積み重ねていくにつれて、ますます地元の方にとって欠かせない、大切なメディアに育っていきまますことをご祈念申し上げます。

茂木健一郎 (脳科学者)





モテモテさが100号特集! いろんな豪華企画を考えましたが、逆にこういうタイミングしか「中の人」が出る機会はないだろう、ということで本誌発行人兼統括責任者の橋詰空と編集長の梅木誠太郎が100号までの歴史を振り返ります。結局、モテモテさが史上、最も地味な特集になった気がしますが、ちよっとした裏話もありますので、気楽に読んでみてください!!

100号記念? 本誌発行人 × 編集長 地味ジミ対談

ほぼ素人で創刊

編集長・梅木(以下「梅」) まずは橋詰発行人兼統括責任者から「モテモテさが」創刊までのいきさつを。発行人兼統括責任者・橋詰(以下「橋」) 佐賀新聞グループの商品として佐賀市内全戸配布のフリーマガジンを発行したいという企画を温めていました。営業面では自信があったので、記事を書く人を探して梅木編集長を口説き落としたりして人員を揃えて2010年8月に創刊しました。準備期間は約3か月間だけ。エイヤツとやるの大事!

梅 新聞デザインや記者の経験はありましたが雑誌編集は初めて。スタッフのほとんど未経験者でした。カメラマンもいないので、本やネットで「美味しい料理の撮り方」の記事を読んで研究しながら撮影していました。手探りだったけど、今思えば：まあ大変でしたね。雑誌の名前がなかなか決まらなかったなあ。

橋 最初に思いついたのが「もってけ」。無料雑誌らしい景気良さを全面に出してみました。でも全く同じ名前のフリーペーパーが他県ですすでにあることが分かった。と同時に相談した人から「持ってかかないでほしい」というツツコミもあり、いろいろ考えてもってけ、もってて、もっても、モテモテや! となった。雑誌もモテモテ、町もモテモテ。佐賀にはモテモテになりうる文化がたくさんある。今の佐賀県「佐賀さいこう!」に通じるものがありますが、

そんな佐賀の良さをもっともって佐賀のみなさんに知ってほしい、という思いを込めて「モテモテさが」になりました。

梅 創刊当時は夜の情報誌と間違われ、電話で「持って帰れ」と怒鳴られたこともありましたが! スタッフも最初は電話がかかったら、「モテモテさが編集部です」と恥ずかしそうに返っていました。ただ「モテモテ編集長」にか違和感がなくなりました。ただ「モテモテ編集長」と言われるとちよっと自分を誤解しそうになるので、自戒を込めて「モテモテさが編集長です」と訂正させてもらいます。創刊号の思い出といえば、なんといっても特集「ガンダムを佐賀に呼ぼう」です。

橋 お台場にあった実物大ガンダムが静岡に移っていた。永久展示ではなく、またどこかに移動するという話になっていました。当時、新聞社にいた編集長が「佐賀に持ってきたい」と相談してきたのが、このコンビ?の始まり。だから当然、創刊号はガンダム特集。

梅 全く議論の余地もない。実際にバンダイの担当者には、佐賀に来てほしい、と電話したら、苦笑しながら「佐賀に持ってくる必然性が何かあれば考えなくもない」と言っていました。それで「必然性」を必死に考えて、何度もガンダムを見直して、ついには思いついたのが「アムロ、佐賀出身説」。妄想とかねつ造とか。でも調べるうちに不思議とアニメの内容とどんどん符合していった、本当かもしれない、と思いついてる自分が怖かった。

橋 創刊号が出てすぐに、本当に佐賀にガンダムを呼びたいという人が会いに来てくれたり、局所的かつ深いところで反響が大きかったですね。「焼肉屋のシヤア」として、その後、連載で活躍してくれました。梅 ほとんどの佐賀市民は「なんでガンダム?」という反応でした。「アムロ山陰出身説」を唱える鳥取の人から連絡がきたり、コアなファンの反応は面白かった。ガンダムの生みの親・富野由悠季監督にインタビューしたときも、すごく楽しんでもらえました。

橋 今思えば「モテモテさが」創刊時って、ガンダムに似ています。連邦軍の新型戦艦ホワイトベースに避難した宇宙コロニー・サイド7の民間人たちが、なし崩し的にジオン軍と戦うことになり、いつの間にか、連邦軍の最強部隊になってしまふ。ほぼ素人で始めた、この編集部とシンクロしています。やっぱり、あの特集は必然!!

佐賀で一番有名な...

梅 「モテモテさが」という名前も最初は浸透せずに、「連邦の白いやつ」状態!!

橋 最初は営業していても、雑誌のコンセプトから話し始めたり、いろいろ大変でしたが、2年目くらいから「モテモテさが」を説明しなくても、分かってもらえるようになりました。特にダイエツト企画を初めてからは、町を歩いていて声を掛けられることが結構、多くなりました。

梅 初期の名物企画でした。最初は「真・モテモテ編集長への道」というタイトルで、ダイエツトだけでなく、文化センターのいろんな講座を体験して中身を磨くという設定でした。当時は90キロ以上あったんですが、目標は1年で60キロ台。最初の9カ月は、寝る3時間前の食事制限だけで嘘のように痩せていったんですが、途中から全然減らない。残り1カ月の時点で目標までまだ10キロ。そこから断食ダイエツトを続け、最終日3日前になって嬉野から佐



創刊号・2010年8月号



2016年4月号





賀まで歩いたり。さらにおがくず風呂とテニスをやっ
て、なんとか69キロまで落としました。本当にしん
どかった。ゆるやかに回復(リバウンド)していきま
したが。

橋 その後「真・モテモテ統括への道」がスタート。
編集長の連載に載っていたグラフを見たら、体重が
減っているのは最初と最後の3カ月だけ。もっと速
く痩せれるやん! というノリで2011年10月号
から始めたんですが、まあ減らない。すっかり「瘦
せないダイエッター」として市内で有名になり、企
画に協力してくれた方たちには「営業妨害」と非難さ
れ。対決方式にしたら本気になるやろうというこ
とで2013年1月号から「真・モテモテ統括への
道VS編集長編」に変更しましたが、まさに泥仕合



2013年8月号



2012年8月号

橋 世代的には稲垣潤一さんインタビューも記憶に
残っています。イタリアサッカー界伝説のファンタ
ジスタ、デル・ピエロ選手が表紙になったのも、
なんだかすごかった。著名人で最多登場は脳科学者
の茂木健一郎さん。佐賀新聞文化センターで特別講
座をしてもらっただけでも有り難いのに、佐賀をどん
どん好きになってしまい、ついにモテモテさがでの
連載が始まってしまいました。

一番印象に残っているのがAKB48の峯岸みなみ
さんとの対談です。ダイエッター企画のゴールを記念
して、当時、某大手肉店改造ジムのCMで衝撃的な
姿を披露して話題だった峯岸さんとお話するという
企画。ダイエッター苦労話でお互い共感しました。
AKB48の仲間との食事会で、指原さんや大島さん
たちが気をつかって、鳥のささ身を頼んでくれたり、
パクパク食べないようしてくれた、との友情エピソードに感動しました。

梅 逆に地元にとだわった特集もありました。普段
なかなか気づかないような佐賀の良さを掘り起し
てみようという企画でしたが、毎年1回やっている「た
だ歩くだけ」特集。これまで大和町川上と富士町古
湯を歩きました。事前になんの調べ物もせずに、ふ
らふら歩くだけなんです。歴史や文化、産業など
いろいろと分かってくるものがあります。普段は車
でスッと通過するだけの場所も立ち止まってみると、
全く違う風景がある。これからは、そういう観点で
郷土を見直していきたいです。

橋 連載ではやっぱり「金曜日の子羊」。創刊以来統
括している企画ですが、当初は相談数も少なく、深刻
な悩みが多かった。「敷金を返してくれない」とか
「自営業続けるのが不安」、「人生とはなんなんでしょ
うか」というのもありました。今、読み返すと、そ
れに対する答えもすぐく長く丁寧です。非常に真
面目に考えていました。相談がたくさん来るようにな
ってからはバツサリ答えるスタイルに変わりました。
最近では月200件くらい来ます。インスピレー
ションを大事に答えています。

梅 この感覚にずっと引つ張るつもりかと、思っ
ていたんですが、急に痩せた。あれは何があっ
たんですか?

橋 某大手肉店改造ジムの佐賀支店ができること
になり、例のCMに出ないかというオファーが舞い込
みました。佐賀で一番有名なダイエッター失敗者とし
て認識されてたんでしょう。実際に新宿の本社に出
向き、面接を受けたんですが撮影スケジュールが合
わなかった。次の撮影は2カ月後。担当者からは「もっ
と太ってください」と言われたんですが、その時
点でダイエッターしたい気分が高まっていた。そん
な待つとられん! ということでリョウユーさんで
トレーニングを始めたんです。

梅 具体的にはどんな方法で取り組んだんですか?
橋 糖質制限と筋肉をつけるトレーニングです。最
終的には2016年2月号で達成。78キロまで痩せ
ました。その後もそれを維持するために毎日5-10
キロ走っています。今も出張先では必ず走ります。
特にヨーロッパは楽しいですね。さくらマラソンも
2回完走。昔はただ走るだけって何の意味があるん
だろう、と思っていたのに、人間変わるんですね。
ただ最近、ちょっと太ったので、これから年末にか
けて、運動量を増やしたいと思っています。

深刻だった「子羊」

梅 「モテモテさが」では人脈を駆使して著名人にイ
ンタビューをしてきました。AKB48グループから
は指原莉乃さん、前田敦子さん、大島優子さん、渡
辺麻友さん。HKT48は第1回オーディションから
密着しています。佐賀出身の宝塚歌劇団の元宙組トッ
プスター・朝夏まなとさんや歌手のさだまさしさん、
クレイジーケンバンドの横山剣さんなど、多彩な人
たちに「地元」への思いや、「壁の乗り越え方」、「佐
賀へのメッセージ」を聴きました。



2016年8月号



2013年9月号

さらに佐賀を「モテモテ」に!!

梅 最後にこれからのモテモテさについて、発行
人兼統括責任者からひとこと。

橋 100号を迎えることができたのも、「モテモ
テさが」を支えてくださったクライアントさんや、
丁寧に読んでくださる佐賀市民のみならず、佐賀市
の全家庭に届けてくださる佐賀新聞販売店のスタッ
フさんのおかげです。さらに佐賀を「モテモテ」に
するために、面白い特集や連載を掲載していきます。
10周年、そして200号を目指して恩返しつもり
で、誌面をさらに充実させていただきますので、今後と
もご愛顧をお願いいたします!

